

武江年表

一

伊地知文庫
文庫20
383
1



武江年表

江戸書鋪

青藜閣



武江年表序



伊地知氏書冊

龍泉大阿之塵。お豊城也。蒨
 蔚紫之柔騰。誇斗牛之間。其
 威靈如此。而終出於石函。且
 雌雄似雜。嗚呼。何頭悔也。
 聊。之。恠哉。隆然。其。至。復。お
 匹於延平之津。則。其。或。可。為。知

武江年表序

正字全 牙戶
矣。其害一可益見矣。由是觀之。嚮
似可怪者。卽是泉阿之威。
需所以傳于萬古而不磨滅。而
顯悔之取關係。為案大矣。豈翅
象以凡物之有匹。自有其
數存焉。何桑受之失得哉。
友人齋藤月峯。寄職之語。

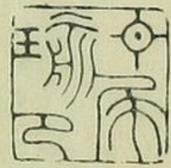
著書者千一種。既行于世。今
茲又著武江年表八卷。分
為雌雄。先取其雄。四卷。持
之。其為書也。自慶元鞞鞞
迄于今日。大之天災地妖。坊
街之沿革。世態之遷流。物
之權輿。事之興廢。小之少

人之生率神佛之啓合龍及
風謠俗談珍玩戲具。經羅
不遺。攬撮尤勦。凡二百年來
之事。讀一洗一來。隨求隨
在。族者受其易終。而更無
繼。豈無繼哉。事勢殊掌。操
觚不苟。退待來日耳。其至

如象阿復匹。至麟括沙彩
光射波。具生美。可全見矣。
其功可念。知矣。然別此編
之。雖嗚以待來日者。亦取以
地。雌雄相匹。傳于萬古。而
不朽也。與其何憂之。須
日。剗剗。旋工發。兌卜吉。仍舊

貫乞為。朱亦不敢。辭便題
蓋辭以為延。平前。等云。
嘉永二年。屠。雖。心。墨。月
上。游。

荆山陣人源瑜



七十若戰。驅。親。鯨。依。扇。藍
輿。教。太。平。宮。朝。貶。孫。謀。臣。列
國。日。光。高。照。海。東。城
試。神。劍。罷。并。收。權。二。百。年
間。不。動。兵。官。家。今。日。真。無

事發震高歌唱太平

四月十七日作二首

右二絶句若文化乙亥夏

日光宗廟弗忘之辰鵬齋氣回翁
之作手親筆取以贈先考也々取
以弁於卷首云

月峯誌

提要

○慶元より曰降昇平の化光世を被り教下の甚敷日小陪せり此故小
遊洒僻境の人とひとしき里を遠くせせり厥佳廉を着願度去と
作くともて郷土の父祖の名所國會ありて後視の禁と一決小余ら
感事記を繕して示守引とて再此輯をあら村澤野塚のありし
在武秘華の梗葉を知くむるの一助と云

○此編并載所所の中人以上の身月小解るとと久小く地理の沿革
或は坊間の風俗事物乃格要小至るまで獲る小隨う遠く素と
公迎乃濟事の切ひ知る小た小あつたため傳算せる事も傳算るれ
たの并編せり

○是元以來新地を撰むは流産列居の舊邸地を阻く可く小播
寺社民屋も地を編むる新小創り或は舊改の舊小置りて處を
畧小するの類もたておふへり以て此并見算小とて以て一二を

河入國の後不日尔河津地志同の鹽を江戸へ運送えんさうの爲彼地より船の通達を
塘しぬる小尾今の字橋の通ありと有り
天文より元龜のころは河津より小田まで
陸の年貢を納め河津地には碑も残さず

○八月平河天満宮 河津城内梅林坂より 河津城の北平河に移さる

○夏津勢の与市よりくる若狭親橋の辺はつらま 小錫湯風呂一ツを立ちふ
は橋き

風呂後永紫一旗あり皆人喰く〜れと〜へり
若狭長見安
集小出

○四嶋山廣津寺今下谷
小あり 小田系小寺が今年小系家滅亡の後江戸へ
此時の位指を希度和尚より小田
津田へ移りまゝより後賢取申今の

来り今の昌年橋の沼地を算單店を営む

○天正の頃算系小乱波風間と〜る強盗あり黨を結び陣中はも
忍び入て盜を立ち流人お色りらるる今年より何と〜る逃退ひのき〜る

絶ええ〜り
小系五代記
小あり

天正十九年辛卯 正月間

正月冥八州の徳家さへい家首の河津と〜る始々登 城あり〜と云

○十一月算系河津社きふり河津寄附願の河津朱印をもち〜る ○赤坂一ツ木町河津家

○十二月算系八州通用のさめ小判小刺を造しぬる
以時代銀一板九合
きくふふあ〜り〜り

○小田系まじまじの靈風山種蓮寺今年後町へ移り後赤坂一ツ木へ移る

文禄元年壬辰 十二月八日改元

河津城の西北の地大活書組尻宅地をもち〜る六組小分あり一書と〜る

六書ま〜るの名目あり
是より書町
と〜り

○田系あし山抄頼与天正十八年小田系より河津へ移す〜る

本館町の地小寺院をぬる
天文元年又河津町へ移すは明唐の災後河津
移さるる河津の寺院も〜るに〜る

被地の高岩も改易小江戸へ〜る喜家領城町の算系入在司志右衛門水家系小姓
一老の子あり父果て後小田系落去あり〜る以年十五才あり〜る家来のぬ抱
あり江戸より河津のゆのふちま〜る居治〜るが隊長の後領城町算系のゆをもち

友誼を以て廊をひらけり尚元和の件小あせり又小田原の豪家増田と云ふ友
友嘉明人小又靈香といふ服某の方を授り一が如く家あせりて後江戸小あ
本町に丁同小住といふ彼某と住居ふ小大小あ
ありてはる今ハ他人の家より製せり

文祿二年癸巳 九月閏

天正十八年の後島川一寺地をぬきり一日照山法師冥山英峯今年

道三河屋へ移天和三年津川 ○惺窩先生飯欽始て江戸へ下藤窩の室

我有中ノ庵 台命を得る中ノ庵貞観政要を讀む一困暇四景我有解のうを

飛りて在軍の遊遊とま 是とと士家武時陽田流波を云と又いんは文集小
見えたり未だハ畧以惺窩和弁集小なりと云る時

たうあさもうくやとあをゆりゆむ秋の月の東海の北々々

○天正の頃常陸國江戸時々の小本小住の法皇一羽と云兵法の名人

あり王子泥舟畧間小態根後菴角と云て名を得るえ 父子二人あり

徳是子病の時菴角の病人を見換て逐電ちん江戸へ来て微塵流と

名付一派を起して弟子多く随へ上見ぬ徳の勢ひを以て一羽と

二年さう病死して友人の弟子菴角が本を以て孫傳りいまいな

人の内江戸へ下りて菴角を討べと後一んをとりて小態小あゆり

う小態ハ江戸へ報く泥舟ハ固小止り麻島の社小菴角相伝を祈る

小態江戸へ下りて文祿二年九月十八日日本橋より菴角小あ

より官府より船事を以て木刀根後を預り木刀の仕合を以て一羽

一羽友人木刀を持て去るる菴角打負ては協たより逐電ちんして

行方を知るい 以上小東又代記のうを畧以史尾菴う編のち家小子と云

同三年甲午

九月千坂大橋を始て掛くは 此地の鎮也同本態時指現別當田務院の記録小

橋板よりありては橋板倒して船を斃一船中の人あり小漂ふ伊名度無時指現小

移りて後橋
まことり
○今年米穀豊饒あり

○小田系不老山壽松院今年当地に移させしれ今の龍治橋の同小
と流をぬちる後年神田柳系の辺へ移り又後系へ移る

文祿元年乙未

武蔵小判蔵 光次と奉書以武蔵と ○小田系當知山奉誓す江戸小判
あひ日は谷橋所町の辺へ地をぬちる後年喰町の辺へ移り天和二年
の後今の地へ移る ○芝長見安集之舟町と日市のあひふちひ
さた橋只一ツあり是は後橋の橋あり文祿四年夏のあろび橋のり
あろび後橋を築かす水築りちありてありしや
官府へさしあつりまよりい橋を後橋といふとありあろびの船町
兼日市町は今の残りぬ橋のあつり小田一橋あるべし

慶長元年丙申

七月間 土月二十七日改元

一步并小判金始て通用 芝長見 ○六月十二日系所蔵内算本法大
難又水毛障 芝長見 五寸 ○閏七月朝鮮人來艘 ○閏十二月大地震月と途
止む ○後河原を築くる ○多田宗玄といふ人靈告をさかりて系所
本山の辺より某所像を携りて奉庄ふ安け今の多田の某所あり
○後町常仙と宗基宗実某所を安と

同二年丁酉

新田不老山感應寺宗創 本山日感上人ありは地不詳然七年
ちを建つ今岩中小寺新田感應寺といふ

同三年戊戌

松平為後と後別より江戸後河原の下へ移る 後寛永十八年
移り今の後系へ移る
○八月三縁山増上寺日比谷より今の地へうつる まことりハ今のヤヨス
の寺日比

世時正造嘗有事孫金考云世本堂の世頼模の由を以て造る加ふ子孫ありても世時とあり

○大城所普濟寺付柙町のる場所用地あり大の辺の遊女屋とも云抄

預ち前へつる○世時代造く不道橋多あり武家藩邸後移多

○南窓よりタバコ蕃株を渡り長崎より播る場ありめてタバコを栽

一説天心中書入
持海ももりの

寛文十一年 丙午

大城を築起ある二月より始り九月尔成終あり

志の所如原祀後より清正祀後より大なるを載せり世頼よりひうり

自ら吳橋のか立して善政

○選置(清書并物とも賜る積出の使もたす

寛文六年

のほり下り商賈のたすん

○城兵田彈(清書)と下

○六十六別行実を結て枯る○幸以昌清と三河橋筋後河意とる後

のり○十二月八日永樂銭法停止通より用小(手)有日本橋(きれを

寛文十二年

とむり

小桑女麻の時冥本中永樂銭を用へて令せられびと残り上方より天下は一統となり二銭宛定て用ふある事とも永樂一銭のりありふびとに足銭を爲てきよ是れおのり足銭をえりひ万民安うりはとて今年永樂を止むひ一は永樂代記ありり或記云永樂一銭又金をよと定め合ふりり此の面銭一銭は除きて足銭は合ひ永樂一廿人の價を除て九十六銭をりて通用とあり

同十二年 丁未 二月間

二月十二日より十六日まで

清城の事あり觀世金春勅進能具行あり

同廿日同前あるか雲の神子お國勅進奇舞妓具行あり

見伝又村を刻てお雲は小村を

り人の娘と云くおふり

○烟系法州(弘)あり上下を統

のま山本の骨董集あり

悉く火を吹そけりて吸ひて後ひきせを利ひて紙小紙せひきせるの製法を

利ひ或ハ舟のラウを用ふ又木をきりのを下敷ありて造りせる器ありたり

○通清園白伝平公清下向ありは時梅老をよ本母と改めひ歌をか

よとせにをわいてこ一歌ありありめても事とんまを

東より見ゆる舟むはしの色乃江戸くく水とひくくの南田川あり

○閏二月朝鮮信使初来聘 正使長祐吉副使 慶選筆丁好寛 ○八月八日客星現行

慶長十二年戊申

林道春先生清儒若小命世くく世時と先生後世を立

同十一年 己酉

三月日月の容方ありて現る 皇幸代答小方形 月出満波如番

○二月島津度琉球を征して仲山王尚寧とを將ひ来り

○八月阿茶院始々入貢奉書 唐船始々来

○湘草所創撰 一洗元和元 年ともいふ ○秋品川海舟初為山際より海始まると千

乃際乃透幅を度けくは河還自中をささくあり

同十八年 庚戌 二月 閏

芝愛宕権現神社拜殿閣門石階木造建立 田福もこの時建立と元和二年の丙辰 紀行小堀のりらの詞ありてをりや

造りひろげて今い 大層とありぬと云 ○根町不知足院佛建立 後持院の 旧名あり

○七月十九日勅して坊上寺十二世貞蓮社源卷上人一普光親智法師の

屋をあらふ ○八月琉球始々發府并江戸 河城へ入貢王尚寧奉書

○官醫吉田宗狗卒 其子宗達又良医のゆゑあり大橋宗柱 も宗狗の男あり 其書圖式一巻を著け

同十六年 辛亥

正月二日竜口蒲生疾疫落火火中門外仙人羅漢の彫物ありて災原

ありしは世時焼くると云 ○琉球聘使来 ○京中亦耶蘇宗再發

○龍徳山雲光院阿茶院建立 了信町の 焼あり ○六月廿二日加藤肥後と清正率

○官醫善養安流正理卒 四十七才五日前と号山城守の人あり 曲直原及この門人ふ

あり後傳を嫡子正田小濠て別在し退居也

江戸町は川多しありしと皆荒川なる事 河城の堀をめぐり日本橋へ
流るる川は一筋幸川ありて其より小川なりし事其小川は神田川神田の氏子西浦
ら山王権現の氏子なり

江戸より西へしり細き流し一筋ありけり其神田山原の柳並よりあり
たり 中畧 地あり 河城堀のめぐりを流して其町へ流るは流し小橋あり

後せりさき中もは留たき橋ありて其もあた橋ともあり其も宮前
はらち入心後かき水の帝より日本橋へ物使する數百人の唐人江戸
來りし事そのまじりてありてありし事其小川は神子なる事其は好ある事其流
より神子を集めりし地流のありし事其を雁り神子を隈りあり
し並ぬし神子なる事其より小橋一ツありて其を神子橋ともいふなり
の町を神子町といふ

井の水は塩き入り万民を苦しめし事を傳みあり神田川神田山原の
ありし事其の町は流し山王山本の流しを其南の町は流しは二ありし事
町はありし事其ありし事

虎の御門より愛宕の辺田地ありし事 野上橋の木より幸ありし事 桜田
いひ田の沖のありし事をいひし事 今の源助橋は其時ありし事
狭りし事其ありし事

江戸町築島坂筋進能毎月毎日ある事あり
此条又代記ある事其大なる事
小一尺のち更及者なりと其橋
一能ある事ありし事 町ありし事其は其の流しにありし事其は其の流しにありし事
毎日初を能ある事其は其の流しにありし事 万葉集の遊舞小書命の事其を其ありし事
江戸町小太谷草人よりありし事 居風呂といふ所の事をいひし事

貝人園集小齋臨ら流系親世より湯島天神神田明神貝塚山王権現
桜田山小ありし事 増上寺吉祥寺廣徳寺弥勒寺東光院常楽寺と幸ありし事

ありあらねどもあまきり限らふあはれ
○本江の富士ふじのたけの上 約は
らうしてしちせん 庄屋をなう六月一日大市立く勢田をさるる

以上考し長見入文は集ふ不載
抄るし旧抄あり
由き加へるりやう

○この頃傾城屋定りし廊ろうあかくあく不敷せんざい在江菊町八丁目十六七
朝系六重より来る鎌倉河原ふ十口朝緩河弥初町より来る大橋の
内柵町ふ廿四朝慶長十年ふ元徳頼も希引紙は大橋は今の常盤
橋より柵町は今の道三河原のふなりしと云せんく 醒世氣の奇海若おも希の
後を考す後ふふ足普通の流あまきと事合考今の系橋具足町の
系草沼の汐入を築きく傾城町と云は地九九く一一方はふふ
南の河側をすく町水の河側を柵町と名つ事申一篇の在りし中の町と
名つくと云くこの流ふとれは芝芝の頃江傾城町へ系橋の柵町より今

柵柵町ふみ町ありと云く
たのむりのあまきり柵風ふふれてと云く
あびこ云くこの流を申りしと云く

この時世風呂屋湯女を申りぬ
見は集ふ天正の頃の流湯の事を云て後ふ
云その頃の風呂屋さんまんの人もあまきりて
ありあつた湯の事や急う流りてあまきりぬと云くこれ流湯ありともあまきりぬと云く小風呂
の口ふふふさうぬさき風呂をぬきしう今も町々毎ふ風呂ありびこす流湯あり
あて入るなり湯女といひてあまきりぬ女は廿八人あまきりぬと云くあまきりぬと云く
くあまきりぬふさうあまきりぬと云くあまきりぬと云くあまきりぬと云くあまきりぬと云く
といひてあまきりぬと云くあまきりぬと云くあまきりぬと云くあまきりぬと云くあまきりぬと云く
あり朝より日く一暖ハ七時ふは舞臺のうち風呂入人の垢を流しは湯女も七つ切ふ
仕度と云く八時の支度を相へ書附ありしつ風呂のより垢を周る格子のあまきりぬ
あまきりぬの原風あまきりぬと云く火を燈しは湯女も在後をあまきりぬと云くせんを
小舟舟の物さうと云くあまきりぬと云く

○書籍を板小刻む事と始洋ありしは江流津指字大業經の事系鑑小
目んえり元久二年法然上人造る所の選擇集を板小刻む事と云く
たりされと戦ふのま火小羅りぬと云く亡ひ天正の頃迄の板刻の書は事
あまきりぬと云く小芝芝長江系鑑書の書を刊行し寛永の頃より板刻

向^向の刀を拵又^又鎧をのり女らよき人となるが髻毛^{髻毛}をうとたて
 つけ髻を衣の巾着^{巾着}に込下^下ふ衣うらぎ^{うらぎ}〜[〜]り帯の男の帯幅^{帯幅}と同じ
 常の女の髻髻を眉の上^上ふある髪^髪切^切く前髪^{前髪}を^をあつ^{あつ}り髻^髻た^た下^下ハ
 かさ^{かさ}た^た丸^丸くお^おね^ねて^て襟^襟の^の後^後ふ^ふわ^わり^り首飾^{首飾}の^の形^形を^をて^てあ^あり^り衣^衣後^後は^はう^うら^らぎ
 の^の衣^衣襟^襟は^はさ^さぬ^ぬ〜[〜]あ^あれ^れ〜[〜]一^一條^條の^のろ^ろふ^ふ花^花を^をわ^わり^り上^上に^に襟^襟幅^幅を^を
 細^細〜[〜]色^色〜[〜]あ^あり^り〜[〜]留^留り^り〜[〜]〜[〜]中^中ふ^ふ小^小紋^紋付^付〜[〜]る^るも^も見^見ぬ^ぬこれ^{これ}の
 練^練緯^緯 今^今も^も異^異 耳^耳目^目 又^又襟^襟〜[〜]も^も有^有べ^べ一^一枚^枚の^の女^女の^の衣^衣は^はう^うら^らぎ^ぎあ^あり^りあ^あり^り長^長柄^柄の^の傘^傘を^を
 携^携き^き又^又色^色〜[〜]の^の袖^袖を^を續^續合^合〜[〜]る^る裳^裳を^を買^買〜[〜]り^り是^是も^も衣^衣後^後の^の襟^襟幅^幅わ^わり^り
 又^又女^女の^の着^着の^の巾^巾着^着の^の巾^巾着^着を^を二^二布^布合^合て^て纏^纏〜[〜]る^るを^を後^後の^の〜[〜]ふ
 尻^尻下^下ま^まへ^へり^りあ^あり^り又^又手^手拭^拭を^をは^はき^きの^の下^下敷^敷の^の方^方た^たふ^ふ席^席の^の〜[〜]ま^まへ
 ぎ^ぎげ^げ〜[〜]る^るも^も見^見ぬ^ぬ巾^巾着^着子^子を^をう^うら^らぎ^ぎ〜[〜]る^るも^もあ^あり^り又^又男^男の^の肩^肩衣^衣幅^幅狭^狭〜[〜]ひ^ひ

あ〜小社の如く〜き合て〜級所の中小横筋を降〜り昔ハ武士ハ又〜
 總髪総髪の若老人若老人などハ強〜り女〜天和貞意の以までも〜り有〜り
 毛毛後後もも謹謹〜[〜]見^見ぬ^ぬ又^又髻髻ををせせ〜[〜]る^るも^もあ^あり^り〜

元和元年乙卯

六月四日 七月十二日改元

お田原稻荷社建立 お田原 ○六月十一日古田織部正乗 一政六年 庚申と云

○六月十八日山内清宗清宗が練物始練物始る清城内清城内の〜
大徳寺町を敷〜
 新の町もけけ既不
 あり〜
 あり〜
 此地〜
 此地〜
 ○小石川白山権現社勅清勅清を奉高奉高地地の今今〜清殿海の内あり〜とて後
 兼兼惣惣ふふ〜[〜]今今の^の地地〜

同二年 丙辰

神田明神社神田橋周神田橋周より湯島湯島へ移る ○築土明神社築土明神社延暦門延暦門外外より今の

元和四年戊午 二月間

二月 濟之河堤立あり 今の津島郡の ○日本橋津再興

○河堤の辺より火火探田焼爰 ○十月宮の刻長雲が 禁里が

○月白の勅堂津再建十一面觀世音を安んずる東雲山に於て

中兵衛山秀
算修心あり

同又 辛巳未

夏より冬より入りて毎夜白氣を東南の角の如く長數十丈又

禁里を東より入りて火とすの如く

○又月より八月まで大旱又穀也く人々多く死す

○大坂津を書給 ○長谷川其家と云ふの為久保八幡を境内より

時の鐘を創設致室中甚切也く福 ○九月十二日櫻雲先生卒

九十九才門入林道春先けりふも其たり名波た田舎に云
麦不を得菴松永昌三宅并 齊よりりこの世に於て

同六年庚申 十二月間

後長山普門院隅田川の辺より龜戸村に移る ○二月十日後友代

光亨卒 九十二才 ○十一月二日僧と云ふ中真觀智國作入寂 七十七歳

○淡路津荒始く遠 ○日本橋を築せしむ 其陰の爲小築せしむ

古より多くを築く所なるを築く事あり
日教六十歳日教を築く事あり

同七年 辛酉

二月觀世と云ふ一代徳貞行を揚新東洋

○九月廿二日小堀遠州侯と云ふ後長山に友友を築するの蹟とて津家

川の舟より酒舟を築ふと送る事あり

為り来んと云ふの如く一人を築く事あり

○十二月十二日織田有樂兵衛七十才恒居の町をえ敷奇屋町と云今あり有屋恒居あり一あり

元和八年壬戌

活所遺稿 壬戌元日遇雪

雪隨世事正紛々 閑座牕間東武春 諸葛青蓮開隻眼

笑而不答當時人

○十一月源通村に冨島東山下向わりの紀行を定東海道記とあり

十一月十六日

江戸より人介あひたり一書にあり奇なりありありあり

富士のねらみやくと同一ひともありありありありありあり

同九年 癸亥 八月間

正月朔の夜遠澤郡流邑餘動溪より小瀬よりその二つを記す

歌を掲す ○正月八日智恵白道情隨意上人寂七十にやと入世のゆきをの身なり徳人そのみ

○芝場とす山門浄再建六十に芝場とす一書にあり

○十一月十六日幕所奉因坊日海寂六十に幕所とす一書にあり

世年間記事

女奇の精波を捕せしれ男奇の精波とあり女奇の精波とあり男奇の精波とあり

○奉所一月より葛西まで船通一々一二三に又の船を掛

船通せしめり六つをわたり寛永の始の事ありとあり船通せしめり六つをわたり寛永の始の事ありとあり

寛永元年甲子 二月晦日改元

侍勢侍難宮より長官おに市双太神を江戸日本橋通二丁目

おあり同十年おあり今おの地代地 近海ありとあり

○長崎法中靈愛を感し永代高子八幡宮を勧修を同八年再

毎あり ○目黒村石動堂は再建 ○淨西把孫重復

○東叡山實氷より淨建立園山慈願大師あり 幸海金考は此の堂を建

の地を考附あり一西より一
の地を考附あり一西より一
の地を考附あり一西より一
の地を考附あり一西より一

○道平山靈巖より冥削 は所へ今云又巖山の地を削り又巖と人地を

○明石志次助寄お撰く号一に言垣町より晴天六日具行 は言垣を

○二月十八日より津橋より於て中村勳之助より寄お撰く号 は言垣を

○二月十八日より津橋より於て中村勳之助より寄お撰く号 は言垣を

○十月十五日小柄系然持控現社改の藤子終より二字現は言垣より は言垣を

○十二月朝野人素勝 は後通政を文郵立副使通

寛永二年乙丑

湯島小幡禪院創立 是の所妙の淵川劉和尚この所を教慈山天派と云寛永十一年

○南八丁堀一丁目より一丁目社あり 此を言垣と云

○八月指折二堀大工のり 此を言垣と云

同乙丑 丙寅 巳卯

○二月より八月は徳兵衛 は言垣を

○二月より八月は徳兵衛 は言垣を

○耶養字再發 ○九月上野小

神組濟宮清建立

最中おとりの清建立より武江宮本殿山の
境馬田院と号せしむる今もあつたり

○十月吉原又町のあつて今も善徳院

すみ町を善徳のすむ町あり
今も引継いであり

○武江志料に徳家御秘福を引く實永二年十一月十日烏丸大綱を
のち徳家より徳家御秘福を引く實永二年十一月十日烏丸大綱を
指しとる今もいづれ風流あるんま

海軍のこゝろあり

○武江志料に實永永記を引く實永二年十一月十日烏丸大綱を

光慶に法中向の序江戸酒田町を造りあひし酒平親皇の古墳

ありを因りあひて序江の後勅勅の儀ヤククられし勅免ありん

事を差聞ゆりて同二年十二月九日勅免ありし酒田の社内小

まのりけること
梅久永和二年序江の西原院は酒田社に平親皇の墓
を造りしに記ししことと和永永記に記ししことと實永永記に記ししことと

社地ふありしこと

寛永二年 丁卯

二月源通村に清中向あり

清中向の清中向あり
徳岳和向あり

樂家のとよふりさたて武江の事ゆりの藤本川のたまた

○東叡山仁王門常の事法光寺二ツを經堂多宝塔清建立は附法堂
宇法堂

○八月八日芝愛宕山権現社災後再
法道堂者 ○八月法光

○大地震 ○十一月塔協沙古末使の名を
理加ト云 ○新羅より琉球へ海りすのこ
すのこ

の種薩州へ始りし海り
は之圃の編の教梅子小丸丸は二十一年末のたすあり
あまのいづれをた方治實久のいづれはまあり

同又年戊辰

正月二日系橋紀伊守屋又吉まとりありの元来無事ありし大伴

河系弘法大師の示現を夢り六字のたの事を書けりて二月廿一日

たの事を書りてたの事小牌をたつ聖徳太子御書とあり

○正月廿日

柗堂小於之津連舟會あり

足は津連舟會の始りありと云
兼之息日未十一日小あつて

○五月廿二日入谷正覺寺開山慶育禪師齋

三夜忌時よりあり一人なり
百又十又とりの小あつて

○一乃流小野派劍湖祖小野次所右衛門率去

勢次の人にて孫子と曲指ゆり
上総小居くま一乃流存一乃流

学小後江若小居一乃祖又
の氏と強て小野と改め

○十二月十日官途今大路道三率

ハ十三

○所々辻斬り

○十二月麻後徳元

医所津連舟をよみ

小居氏

冥奈下向の記あり其時句 むき一時、名ころえら冥土の靈
○江戸を白集を揮ふ事この人小始まり

寛永六年 己巳 二月國

六月上旬より目黒村不初寺法成成就するより一乃流

江戸津老翁男女群集

○七月廿七日玉室澤庵の友僧と

流るる沢庵の羽衣上の山玉室の奥乃抄金之鏡

後并ありて玉室は月沢庵の三所流罪せしむり一乃流ありては月かこめ
ら玉室は澤庵支那をめぐり下所大田系より二所よりきて奥羽の友僧と鏡く

沢庵一偈を

りて別を告て曰

天分南北両鳧飛

何日舊栖同翼帰

聚散無常只如此

世情禽亦有樞機

玉室額を和て云

草鞋竹杖與雲飛

舊院何時把手帰

水遠山長猶絶信

別離今日已忘機

八月十五日沢庵完上小居氏

完上川小居并月山流きててまらう浮世よむむひもあはは菴

あひきむこのひの月をぬきのこのあつたの松のつけよんらん全

二所流罪のゆゑ一乃流は菴を高く建物を建て
あるべしこの所 仙洞の由りて并

まらうあつたの流も玉の室もあつてのころむりは月

けころ民名のねり小

江戸味増を二まのりすりてつむののみそとをさるりのふり月

○今年より武家くこ辻番を直る堀ふら於て辻斬あり一板を

寛永七年 庚午

正月八日隅田川あて

古塚の志う一社柳のあつらひささくもむ着るる處 指跡を伝

○二月十日日醫所甲斐連奉率

百十七やうりひのまきのみまて後り一や件
巨武家の男をひきあつちめりういひの

徳本一後十六歳と吸あつきらふ
と名著述の医を柳花をひきだす

○二月小湊延生寺あり一布引祖師

像身以上奉承さうりひ ○二月二日身丈久遠より日蓮池上奉承

日樹宗論日樹伝及飯田小配流 ○六月琉球人奉承

○同廿二日大地震毛降 ○八月山王社法造營

○魚鱈親世者二田の地小安直以 山法天上人を奉承のま
りう勢きりあつりか

○十二月廿二日大地震成刻光物飛行 一と奉承さるるり

同八年 辛未 十月國

三月十九日江戸沖不天降 ○同廿日若尾耳露降

○四月二日淡草ちり上 ○去年より今年まで六十尺波瀾を病

む若多 ○東叡山小大佛像造立あり 築基廣泥を結しそるのやじ
こまを造るゝめらる後奉承

○八月大風お庭を壊ち樹木 新額測りて碑を後
万治の以洞像小あり

を折る ○十月天降 ○十月十二日後夜氏代連奉承 八十ヤ

○十月十七日上野大名焼落立 依るる大橋亮孫之と
彫りり一丈八尺余

同九年 壬申

諸家源秘録云今年より奥良仙臺の茶穀始り江戸に上る今

下江戸に上る二六矣及茶の産ありと云令一と云て七に江戸産あり

○中村勅三所より其居申橋より新宜町へ移る今の入形町あり

○茶屋新設云 寛明日記寛永九年の件より其合つて其子新橋中
其留中より其合初より二十五年の内郭と見えたり

○玉室屋居二所漏處より召還し由ひ七月廿七日に廢ふりたり
新田の廣徳より不寓以去の冬屋居の跡込堀氏子寄居せり其年
二所を大種小種せりぬなり
以爲所寛永十三年兩所不寓飛あり
以不居を祀りて檢束庵とりり

寛永十年癸酉

上野忍より忌林送春先生列莊小先聖廟を建しり
屋敷公由建立し其地を
撥り給ふと云はれり
○正月廿一日廿二日誌國大地震小田原の
別きより誌一同廿六日申刻大地震

○武州忍の城津番城とありしは今年松平直州侯のむりり改城番の

面く江戸へ邸宅地をぬりしを忍系亦忍町とよぶり

○四月より六月まで流あり ○南流す町と丁目の水川を堰ぬ町屋と
せしり ○都内其居居先ありて眞行江未詳

同十一年甲戌 七月間

正月十二日増上より學上人念佛三昧より臨終し其家其の後
身骨寒く舍利とあり ○二月二日 津城おめりて津能其居町
流圓をゆりしは青羽を揚るり是より始りけりしり 或記あり

○二月十九日朝白雲月を貫く ○壬子禮觀社 其社明云

為久保八幡宮 同是正勅堂寺津造堂あり
好色も其社
建たり

○品川おめりて本堂ぬりて二王門は再建

○平塚明社社海建立秋末至く流乾以

○凶年より山王法皇被禱り大旱の禮と候

○宝林山養旨必す親町代地とて宮の谷へ法

○七月琉球人來聘 西使依敷子合衆あり 村山又二席世居葛原町

○八月八日或る災の活祭の室 市村羽左馬 於て始と申真以 祖なり

齒を赤くぬぐひ終ふ今日終由り 藤原宗遠 宗遠の室 おん人の世

○明人安計 後池の上 江戸日平指安計町をぬき又お州二浦遠見村を

願ふ其妻好満尼今年七月十六日終遠見村澤土より墳墓あり

安計の忌日墓碑を竊りて去りて

寛永十二年乙亥

正月廿五日寅卯刻大地震年未刻又地震あり 後府内を震始

○春烏丸大納言光盛 ちうひら 宇奈東山下向あり此月の記を春の曙 あけぼの

又源通村 いもむら 山下向あり

○安宅丸の御船 あやせまる 御船 しづなふね 来り 一説小寛永十一年とも云 柳川町の辺に船を

○二月天台院 てんたいいん 御船 しづなふね 来り 翌年より二年大風おの時預切とて御船を

○六月十二日大風遠及巨舟 とほふね 被破損 わづら

○七月天赤くく あか 如燒 やき ○今帰 いまかへ 如赤 あか 如赤 あか 如赤 あか

○八月廿日 やうじつ 將時 まさとき 山樂 やまがく 出 で 出 で 出 で

○八月廿日 やうじつ 將時 まさとき 山樂 やまがく 出 で 出 で 出 で

○八月廿日 やうじつ 將時 まさとき 山樂 やまがく 出 で 出 で 出 で

○八月廿日 やうじつ 將時 まさとき 山樂 やまがく 出 で 出 で 出 で

聖徳の幕を麗す戸の上を張人形衣裳結構をとりて又舟を修め
若の衣敷等も義をそとせしむるは化動之所もたは極む概せしむ

實永十二年 丙子

正月元日 〇高田八幡宮初詣に
のし初に後之涼 〇大城津市廓惣見附柳形を清善治ありとの時
中と進く由違當者 清城通社を虎野と稱す

芳葉集 實永十二年 江戸ふたり 小大樹城廓修理のありしをい

人法より千歳の名も世にこゝろのちよりのまはれしをいひく鳥光度々
南向活活の頼阿七町目の地は高田町の辺に方より言あり今年は廓を造り
せり小河は堀の掘去を以て東海の名を推す地ふありし由を以ては若又坂町と
しりやと又田舎おころのり小紙ふに言たりい首いふといひし
清入の附今の頼町と御書町と田町とをいふは八幡と清とをいふは人の下中紀
とていふに進しし也 清城をいふは市若の臺に書をいふは表は八十

只に人さしと進し加田若くしりてありこの市善治の所を都より舟車幸来
りし舟車道の並物より市若八幡の所ありて丁馬の地をいふあり所用の
終りて後進し止ありし實永十六年
世ふおころの身所をいふしり

〇井の頭森才天社清善治 〇この別荘書物始りて或は己年ともいふ

〇四月は月後六代業承年 巳十三

〇八月六月のろふふも終りて 西の由東の大島紀石と云ふ
南海まで海路ありしなり

〇新築を築く 實永通宝 六月朔日より通用始り是よりして本期

の銅錢のころふあまなり 昇平の所を清ありしなり此年より

はるあまの後承しきめて清さしありて是は清善治といふは清善治を清さしあり
清海を清さしありて人し事を司りしりし清善治板本南都修治板本に言ふ吉田
清善治は板本に言ふありて清善治といふは清善治といふは清善治といふは清善治
の無善治を清さしありて清善治といふは清善治といふは清善治といふは清善治
寛永ありの勅し今ありて實永通宝嚴儀厚福郭周正孔散す而謂銅を清
まはしを愛まさるなりなりと云ふ實永清善治を世まはるなり清善治といふは清善治
形跡等の遠ひありて實永清善治といふは清善治といふは清善治といふは清善治

洋ありは年梓子ゆり
とて世に稀あり

○十二月朝鮮人來聘

正使白藤任統副使東濱合世深
從事青丘英床 張跋本抄古今

武江年表卷之一 畢

